

昭和二十四年

渡る日に雲は白妙下萌ゆる

へらくと冴えかえる夜の爐火澄める

家計不如意うる山あたり春時雨

藪影に夕陽しづもる春の水

茎立つや荒ぶ日がちの天気ぐせ

祭り了う暮れかねる日がまだ芝に

長男入学

胸札の墨痕淋漓たり入学児

丹精す入学の子の後ろかげ

春曉や音をはばかりる厨妻

立てるより乾く畝土南風強し

雨ぬくく端山雪解の雲まとう

四月八日 野之瀬妙了寺炎上

春の北風遠き大火の煙みゆ

行く春の風雨の中に時計鳴る

春耕や三竿の日に心足り

夏時間というもの制定さる

夏時間八時ぼうたんまだ暮れず

泰元はじめての遠足

花菜莢の朝光に待つ遠足児

労働祭人民広場花了る

養蚕組合で上諏訪に遊ぶ

信濃路や早き苗代緋桃咲く

片倉温泉に遊ぶ

風吹けば噴水が散るベンチ去る

朝雨に青き棟芝四月盡

四月盡麦の朝風光みつ

暮れ遅き空へサイレン野球了う

おぼろ夜や寄れば愛馬の鼻鳴らす

軒端よりたたむ山々辛夷咲く

大柴千鶴子先生家庭訪問

乙鳥とぶ庭女教師が訪問す

南風立ちてキャベツ玉づく水の照り

庭つきの麦は穂に立ち春暮る、

げんげ田に蜂飼うたつき春くるる

甲斐駒の肩に入日が麦穂立つ

初夏の雲恋うホップ縄を攀づ

平賀光照氏庭

大でまりこの静かなる黄昏を

庭薄暮初眠の蚕座かわく香に

乙黒田中本家

菓子胡桃とどのう葉陰乳牛臥す

登校の子に托すバラ露重き

梅雨の闇おもたし麦の熟る々香に

稚雞がつるむ畑土秋涼し

早川送り盆供に蠅群る々

学園秋雲うくプール水満てり

大藪鉦泉へ

日雨して温泉の道の花煙草

月祀る芋掘ればはや露けくて

秋の蛇およぐ水光美しと見き

出水音秋海棠に夕日濃く

尾花咲き雲綿菓子のごとく照る

かえりみる秋虹ははやうすれつ々

昼湯沸く土間の談話菊の雨

夕月に今年しまいの野天風呂

新家婚礼満恵さんとつきくる

かえり咲く木犀の香にとつき来ぬ

麦種子の浄光土に初しぐれ

彫り深き貌の夕焼麦を蒔く

好日の峰山茶花に文化の日

此の年凶作食調委員として陳情に

陳情の人かげにいて暮早し

大石に毒蔓枯る々日のぬくみ

山離るる満月稲を刈り了る

梨大所見

夢多き学徒が憩う芝枯れぬ

添乳すや新藁塚のぬくみ背に

かたじめる庭掃き冬に入るころ

藪深く仰ぐ大樹の冬西日

堰の静冬三竿の日が風ぎぬ

たまく上京二句

心足り帰郷の駅路既に冬

古本の岩波文庫寒き汽車

まだ戦後の様相なり

荒れホームすさびる顔を並めて冬

霜解けや刈る杉垣の強き香ザ

片倉製糸所見

厨婦踏む空の大桶日がつまる